

尾張陶磁(2) —近世の瀬戸物生産—

井上喜久男

1. 近世の瀬戸物生産

江戸時代の陶磁器生産は「本業焼」と「新製染付焼」の対語で語られることが多い。この二つの語は江戸時代の瀬戸物生産の状況を示す言葉として度々用いられる。

本業焼は瀬戸窯における陶器生産業のことを言う言葉で、新製染付焼に対する言葉として使われている。本業焼は窯株の規制の枠に嵌められ、陶器業が一子相伝に限定されたために、長子を除いて次男以下は失業せざるを得なかった。そのため、新規の増株として磁器生産が計られ、その枠外に許可されたのが新製染付焼である。

新製染付焼は1807年(文化4年)加藤民吉が肥前国から磁器生産技術を習得して帰国後、急速に盛んとなった。^(注1)従来の陶器業者は陶器生産から新製の磁器生産へ転業するものが多くなったが、旧来の陶器業を正統のものとして、これを本業と呼んで新製の磁器に対抗したのである。

染付焼は本業焼より格が低いものとして位置付けられたものではあったが、消費者の趣向が染付磁器に移ってきたこともあって、その生産量は増大していった。

2. 近世の窯体構造

江戸時代の陶磁器生産に使われた窯体構造は専ら連房式登窯が用いられてはいるが、古来の窖窯や大窯は省力・省エネルギー・量産の各面からの対比では連房式登窯に劣るものの、江戸時代に大窯焼として焼き上がりの良さから茶器の生産に用いられている。^(注2)

(1) 改造窯

中世陶器窯の窯体構造を語る時に、その窯体の遺存が良好なことで、焼成室内の中央部に横に天井から障壁を下ろし、五本の分焰柱により焼成室を上下に二分する特殊な構造を持つ窯として瀬戸市赤津町・小長曾窯跡が挙げられる。この窯跡は室町時代(15世紀中頃)の施釉陶器窯として、また、焼成室内の障壁が熱効率を高めるエネルギー獲得技術の革新現象として中世陶器窯の窯体構造の変遷に重要な窯跡として位置付けられてきたが、窯跡の出土資料と文献からその時代に疑問が提示されている。

小長曾窯跡は室町時代の窯跡として国史跡に指定されているが、滝本知二氏はその特異な窯体構造の年代観に異説を發表している。小長曾窯跡は赤津村の彦九郎が元禄十二年(1699年)に尾張藩の命を受けて焼いた窯で、遺存する窯跡はその当時の窯体構造であるとする。^(注3)

滝本氏が提示した文献は次の通りである。^(注4)

『張州雜誌』第91 瀬戸村物産○藤四郎藤九郎時代古窖之地名の項に

小長曾窖 平小長曾ノ窖元禄十二年

有命彦九郎焼之

小長曾窯跡は1949年(昭和24年)に三上次男氏等によって発掘調査が行われ、室町時代の施釉陶器窯として報告され、その後は史跡の保存整備工事に伴って周辺域の調査が行われている。^(注5)

小長曾窯跡の出土資料は焼成品と考えられる窯跡の前方斜面から採集される室町時代の施釉陶器のほかに、江戸時代のものとして推定される匣鉢・エブタなどがあり、『張州雜誌』の記載事項に

該当すると考えられる事实在存在する。

従って、室町時代に他に類を見ない窯体構造の小長首窯跡は元禄12年になって室町時代の古窯跡を改造して窰窯と連房式登窯の折衷窯を構築したものと理解することが出来る。
(注6)

(2) 大窯

大窯は連房式登窯よりも燃焼効率が劣るものではあるが、その焼成品の窰窯風の焼き揚がり具合を求めて、大窯焼として茶器生産のために大窯構造の窯体が18世紀まで継続して存在した。

江戸時代の大窯は前代の戦国期から桃山期に専ら使用された大窯構造が少し変化して存続した瀬戸市赤津町・赤津B窯跡と、連房式登窯の燃焼室に続く一部分を傾斜する床面の大きな部屋に造り、大窯の焼成室に似た構造を持たせている瀬戸市穴田町・穴田2号窯跡があり、わずかながらその実体を推測することができる。

赤津B窯跡は工事中に発見されたもので、窯体の一部が残存しており、記録を取ることができたものである。
(注7)

残存していた窯体は燃焼室から焼成室にかけての長さ260cm、幅200cmの部分である。

穴田2号窯跡は燃焼室(胴木間)と焼成室15室からなる連房式登窯である。この窯は3～4回の改造を受けているものとされ、4次の最終改造により燃焼室と第1室の窯体構造が特記すべきものとなっている。
(注8)

燃焼室は側壁を石積みで造り、床面も平石敷であり、焚口幅88cmで、床面が3.4°の傾斜で上昇して奥壁128cmで最大幅112cmとなり、高さ45cmの奥壁の昇焰壁となっている。分焰柱の左右の分焰孔の幅は左側20cm、右側30cmである。

燃焼室に続く第1室は燃焼室の床面から45cmの高さの所から始まり、最大幅192cm、奥行256cmの長方形の平面形となり、床面傾斜15.9°で上昇している。第1室は天井の支柱として四箇所に角材(一辺17cm、高さ23cm)を積み上げた柱を設け、左側壁には幅60cmの室の出入口がある。第2室より上の焼成室は幅よりも奥行の長さが短い室の通例の大きさのものである。

穴田2号窯跡は連房式登窯の窯体構造を採りながらも燃焼室と第1室の関係を取り上げれば大窯構造に類似した構造となっている。即ち、大窯の構造形態に続けて連房式登窯特有な焼成室を連ねた特殊例といえる連房式登窯といえることができる。

(3) 連房式登窯

連房式登窯は焼成室を連続させて燃焼効率を高めた倒焰式の地上窯で、焼成室の床面が階段状なるものと連続傾斜面となるもの、及びその中間がある。

連房式登窯は17世紀初期に美濃窯に九州唐津から導入され、間もなく瀬戸窯にも広まったもので、それまで使用してきた焼成室が大きな単室の窯を大窯と呼び、新しい小さな焼成室が階段状に連なった連房式登窯を小窯と呼び分けるようになったものである。
(注9)

現在、発掘調査によって確認された瀬戸における最も古い連房式登窯・穴田窯跡は連房縦狭間式の構造であり、元屋敷窯跡が横狭間式の構造であるのと異なる。また、美濃窯においても元屋敷窯跡の東方の定林寺西洞2・3号窯跡は無段連房式であり、窯体構造に違いがみられる。

連房式登窯の種類にはその形体には変遷があり、小(古)窯、本業窯、丸窯がある。

小(古)窯は一室の大きさが奥行き4～5尺、横幅3～4間、高さ5～8尺であり、勾配が1尺につき4寸5分で上昇する。構造は連房縦狭間式で、燃焼室(胴木間)の次に捨間があり、続

いて焼成室（3～4室）、煙道部となる。焼成室（間）は床が奥へ僅かに傾斜して下がる。

小窯は肥前から19世紀初期に磁器生産の技術とともに新たに丸窯が伝わるまで、瀬戸窯の陶器生産の窯として使われた。小窯は19世紀初期に新たに伝わった丸窯との競争上、陶器生産のための本業窯としての使用だけでなく、磁器生産にも使用できるように改良されて古窯式となり、新しい丸窯に対して古窯と呼ばれるようになった。

古窯は小窯の古い本業の陶器窯の伝統を残しながら磁器を焼くために改良された窯で、磁器生産の開始以降、染付焼に対する本業窯として使われたものである。

本業窯は丸窯との競争上大形化したもので、構造は連房縦狭間式の形式で古窯とは構造的には大差はないが、室（間）の大きさは奥行き6～9尺、横幅5～6間、高さ6～8尺と大形化し、窯の勾配は3寸5分（1尺に対して）である。

丸窯は1807年（文化4年）加藤民吉が瀬戸に磁器生産の技術とともに肥前の磁器焼成のための窯として伝えた新しい連房横狭間式登窯である。この連房式登窯は在来の小窯と比較して焼成室が大きく、部屋と部屋の間隔が大きい奥行きのある部屋のため、アーチ状に構築した天井部の外形が丸い形をしていたことから丸窯と呼ばれたのである。

3. 近世瀬戸物生産の展開

慶長10年（1605）代に入ると瀬戸物生産に連房式登窯が使われるようになった。連房式登窯はまず美濃窯に導入され、次いで瀬戸窯に入った。

瀬戸窯における瀬戸物生産は大窯Ⅲ期以降窯業が衰退して瀬戸山離散現象であったが、尾張藩の保護の下に再興された状況である。

江戸時代の瀬戸物研究は窯跡の発掘調査が遅れていたこともあって、江戸時代を通じた瀬戸物生産の編年的研究が遅れていた。江戸時代の瀬戸物研究はまず美濃窯から始められ、瀬戸物の編年的変遷過程は瀬戸窯との共通の編年表の作成を目指しながらも比較的窯跡資料が揃っている美濃窯が先行して進み、次いで瀬戸窯の編年表が発表されるに至って、両窯の編年的変遷過程が一応出来上がった。

しかし、瀬戸窯と美濃窯は同じ尾張藩の統制下において、両窯の製品の違いが明らかとなり、片方の編年表で足りる状況ではなくなっている。現在、両窯の編年的変遷過程は一致を見ず、今後、両窯の共通する編年区分による編年表と両窯内部における地区別の窯の製品区分を明確にして尾張藩による瀬戸窯と美濃窯を統括した瀬戸物生産の状況を明らかにすることが課題である。

現在、江戸時代の瀬戸物生産は藤澤良祐氏により三段階11小期に編年が試みられている。この編年的展開は近世の瀬戸窯跡からの発掘調査および採集によって得られた陶磁資料に基づき、形式的に編年したものである。

江戸時代の窯跡は古墳時代から桃山時代までの窯の操業年間と比較して陶工が定着して集落都市における操業ということから、少なくとも長期間にわたり一定の窯で操業していたことが予想され、しかも、窯跡が住宅地の下に埋設していることなどで層位的に全面発掘調査がきわめて難しい状況下であり、単一の窯における焼成器種と型式の設定を難しくしている。

そこで、改めて瀬戸窯跡の出土資料の報告に基づいて、焼成期間の長い天目茶碗・腰鍔茶碗・

広東茶碗等を型式編年することにした。その結果、十期に区分できることになった。十期編年区分はその生産器種により大別すると四段階の江戸前期（登窯Ⅰ～Ⅲ期）、江戸中期（登窯Ⅳ～Ⅵ期）江戸後期（登窯Ⅶ～Ⅸ期）、幕末明治（登窯Ⅹ期）に分けられる。

(1) 江戸前期の陶器

登窯Ⅰ期の陶器（1605～1623年・慶長～元和年間）

織部陶器の生産期であり、その生産は美濃窯において盛行した。織部陶器は轆轤成形の円筒形、円形の対称形を否定した造形を基本とし、“ゆがみ”を造り出した形に仕上げている。

その製品は織部黒・黒織部・青織部・総織部・赤織部・鳴海織部・志野織部・美濃唐津（唐津織部）・美濃伊賀（伊賀織部）などに分類され、その他に灰釉・鉄釉が施された碗・皿・鉢類の量産品が存在する。

織部生産は元和年間から衰退が始まり文様・意匠にも変化がおこる。織部陶器の年代観の資料として「元和八年五月日」の紀年銘がある大富東窯跡出土の織部燭台は鉄絵の筆法が細い線描きになり、残欠品によって上部が不明であるが、明るい銅緑釉が上部から流し掛けられ、青織部の掛け分け技法が崩れてきている。これは織部陶器の衰退現象の始まりである。元和年間の終り頃には弥七田織部と分類する終末の織部陶器となり、慶長初年頃から始まった“ゆがみ”を造形とする織部陶器の生産は終焉を迎えるのである。

瀬戸窯での生産は旧赤津村・赤津B窯跡にみる状況で、天目茶碗・丸碗・長石釉（鉄絵）皿・灰釉皿・黄瀬戸鉢・鉄釉片口・鉄釉搦鉢・鉄釉徳利などが焼成されており、美濃窯で焼成されている織部陶器が存在しない。

登窯Ⅱ期の陶器（1624～1654年・寛永～承応年間）

登窯Ⅱ期は瀬戸窯において陶器生産が急激に復興する時期であり、旧上水野村・穴田2号窯下層窯跡および穴田2号窯跡出土資料を基準とするほか、旧瀬戸村では塚塚山窯跡・日面窯跡・元十窯跡、旧赤津村では窯元A窯跡・赤津C窯跡、旧品野村では窯町C窯跡などで焼成している。

焼成器種は天目茶碗・段付白天目茶碗・灰釉丸碗・長石釉鉄絵皿・灰釉輪ハゲ皿・黄瀬戸鉢・鉄釉片口・鉄釉搦鉢・筒形香炉・鉄釉徳利・長石釉鉄絵大鉢・双耳壺などである。

実年代推定資料は1632年（寛永9年）没した池田忠雄墓出土の段付白天目茶碗がある。

また、穴田古窯跡群は穴田2号窯下層から「寛永拾五年」銘陶板が出土し、穴田1号窯焚口脇から定光寺源敬公（徳川義直）廟の焼香殿に使用されている鉄釉唐草文敷瓦と同類の敷瓦が出土して、古窯跡群として穴田2号下窯跡→穴田2号窯跡→穴田1号窯跡への窯跡変遷がたどれることから、穴田古窯跡群の出土資料を編年することができる。

また、名古屋城三の丸遺跡出土「寛永拾年（1633年）」墨書銘長石釉鉄絵大鉢（笠原鉢）は織部陶器の終末形態として銅緑釉の筆散らしと鉄絵文様を持つ同器種の年代を示すものである。天目茶碗は大型化し、口縁部の立ち上がりは長く、端部は緩く外反する。長石釉の鉄絵小皿は唐草文・重圏文・蘭竹文があり、唐草文→重圏文→蘭竹文へと移行する。

登窯Ⅲ期の陶器（1655～1687年・明暦～貞享年間）

実年代推定資料は登窯Ⅱ期に示した旧水野村・穴田古窯跡群が1667年（寛文7年）に廃絶することになり、窯屋の移転が行われたとする『瀬戸窯焼物師伝記（儀兵衛文書）』に基づいた穴田1号窯跡の出土資料がある。

焼成器種は登窯Ⅱ期の器種が引き続いて焼成されている。天目茶碗は器高がややⅡ期に比べて低くなり、口縁部の立ち上がり部の屈折が強くなって、内傾して口縁端部で強く外反する。また、天目茶碗の新器種として旧赤津村・瓶子窯跡、下品野村・窯町D窯跡に平碗形の内反り高台のものが登場する。

本期に操業していた窯は旧瀬戸村では経塚山窯跡・日面窯跡・元十窯跡・仲洞窯跡・定助窯跡、旧赤津村では瓶子窯跡・窯元A窯跡、旧下品野村では窯町D窯跡、旧下半田川村では、かみた窯跡などである。

(2) 江戸中期の陶器

登窯Ⅳ期の陶器（1688～1715年・元禄～正徳年間）

焼成器種は天目茶碗・灰釉丸碗・灰釉片口鉢・鉄釉搦鉢・筒形香炉などの他、新器種が登場して器種のセットが変化する。新器種は京焼写しと考えられる腰錆茶碗と御室茶碗、通称尾呂茶碗と呼ぶ大形の丸碗で底部高台部に鉄化粧が施されているものなどである。Ⅲ期まで焼成されていた長石釉血類・黄瀬戸鉢が消え、全体的に血類の生産が減少する。腰錆茶碗は体部の一方に凹みを持つもので、腰部の張りが強いものである。御室茶碗は腰部の張りが強く、口縁に向かってやや開いた器形のものである。天目茶碗は口径は変わらないがⅢ期よりも器高が低くなり、それだけ底部からの口縁への開きが大きくなり、内面底部が広がる。

操業していた窯は旧瀬戸村では経塚山窯跡・日面窯跡・元十窯跡・仲洞窯跡・壱兵衛窯跡・定助窯跡・市左衛門窯跡、旧下半田川村では、かみた窯跡である。

登窯Ⅴ期の陶器（1716～1743年・享保～寛保年間）

Ⅳ期から引き続いて焼成されている天目茶碗は底部の高台は殆ど変化しないが口縁部の立ち上がりの屈折が強く、腰部の直径が大きくなり、それだけ高台脇の水平に削り出し部分の幅が広くなり、内面底部がより広がる。腰錆茶碗はやや腰部の張り出しが緩くなり、口径・器高ともに小さくなる。体部の一方には凹みがある。また、腰錆茶碗として体部の一方に凹みのない別種が出現する。御室茶碗は腰部の張り出しが緩くなり、体部に丸味が出てくる。

実年代推定資料は名古屋城三の丸遺跡出土の「正徳元年（1711年）」墨書銘の御室茶碗がある。

この茶碗の墨書はⅤ期の推定実年代の終末期の年記であるが、その器形が本期の型式へ移行したものと考えられる。

操業していた窯は旧瀬戸村では経塚山窯跡・日面窯跡・元十窯跡・仲洞窯跡・壱兵衛窯跡・定助窯跡・市左衛門窯跡、旧赤津村では小左衛門窯跡、旧下半田川村では、かみた窯跡である。

登窯Ⅵ期の陶器（1744～1771年・延享～明和年間）

操業している窯の消長期に当たり、旧瀬戸村では元十窯跡・壱兵衛窯跡・定助窯跡・市左衛門窯跡、旧赤津村では小左衛門窯跡、旧上半田川ではかみた窯跡が存在する。

焼成器種は天目茶碗・腰錆茶碗・御室茶碗・灰釉丸碗・灰釉片口鉢・鉄釉搦鉢・筒形香炉などである。天目茶碗は口縁部への立ち上がりの屈折が緩く丸味を持つものとなり、腰部の丸味と合わせて丸碗状の形状となる。底部の高台は高く、高台脇の削り出しが幅広い。腰錆茶碗は腰が丸くなり、口縁部には筒状に立ち上がり、体部の凹みの器形のものも消滅して丸碗形態のものに転換する。高台は角形である。御室茶碗は形状は腰錆茶碗と同様に腰丸で、筒状の丸碗形態である。

推定実年代資料は東京都新宿区・三栄町遺跡出土の延享4年（1747年）墨書銘灰釉鉢、名古屋

城三の丸遺跡出土の延享5年(1748年)墨書銘の灰釉鉢及び灰釉筒形火鉢がある。

また、三重県久居市・戸木城跡出土の「□□二巳己歳」墨書銘の天目茶碗は年数と干支(己巳)により「元禄二年(1689年)」と「寛延二年(1749年)」二つの年代が考えられ、天目茶碗の型式編年と墨書の残存字体から後者の寛延二年(1749年)が該当するものと推定される資料である。

また、伝世資料として明和2年(1765年)墨書銘の御深井釉刻文水甕があり、双耳付の円筒形の新器種である。

(3) 江戸後期の陶磁器

登窯Ⅶ期の陶器(1772~1800年・安永~寛政年間)

この期から染付陶器(美濃窯では太白手という)が焼成されるようになるとともに、鉄絵文様の新器種が登場する。推定実年代資料として清洲城下町遺跡の五条川河川改修工事に伴う発掘調査により、1794年(寛政6年)の五条川瀬替普請による盛土下出土資料がある。この出土資料はB区S X 01出土の資料で柳茶碗・笹文茶碗・腰鍔茶碗・麦藁手茶碗・せんじ茶碗・長の茶碗・梅文小鉢・梅文皿・型紙梅文皿・染付皿・染付鉢・灰釉仏餉器・小型鉢・火鉢、その他に徳利・瓶・灯明具・甕・播鉢、上絵付茶碗、肥前染付磁器の蓋・茶碗・香炉なども存在している。

また、伝世資料として安永5年(1776年)箱書の麦藁手六角蓋付小杯、安永8年(1779年)墨書銘の緑釉三足瓶掛がある。瓶掛は新しい器種としての登場である。また、群馬県渋川市・中村遺跡の浅間山の天明3年(1783年)大噴火に伴う泥流下の出土資料が存在する。

上記の五条川瀬替普請による盛土下出土資料の器種のほかに天目茶碗がある。天目茶碗は一段と器高が低くなり、口縁から体部へと大きく膨らむ。腰鍔茶碗はやや器高が低くなり始める。御室茶碗は腰鍔茶碗と同様に腰が横に張り出した形態ものとなり、旧瀬戸村・市左衛門窯跡で焼成されている。新器種として長の茶碗が登場する。長の茶碗は全体丸味がある器形である。この長の茶碗と同形態のものに上絵付した色絵茶碗が存在する。色絵茶碗は『張州雑誌』にはその製法が記載されており、その実体について一部にしか論議されてこなかったが、このⅦ期の頃から生産が行われた模様で旧瀬戸村・李兵衛窯跡、旧菱野村・儀兵衛窯跡で焼成されている。

また、美濃窯では岐阜県土岐市・四ツ屋窯跡で確認されている。

色絵付の伝世資料としては寛政11年(1799年)色絵銘の色絵蓮華文角香炉が存在する。

登窯Ⅷ期の陶磁器(1801~1829年)

染付磁器の焼成が完成して量産が開始された。染付磁器は肥前磁器写しの広東茶碗が主流であり、それ以外の染付製品はⅦ期から始められている染付陶器(陶胎染付製品)が圧倒的に多いものであった。焼成器種は天目茶碗・腰鍔茶碗・御室茶碗・柳茶碗・灰釉丸碗・灰釉片口鉢・鉄釉播鉢・御深井釉水甕・筒型香炉・灯明具のほか染付陶器の鉄絵碗・皿類が存在する。推定実年代資料として伝世品に文化12年(1815年)墨書銘緑釉瓶掛、文政7年(1824年)銘染付広東茶碗、文政3年(1820年)墨書銘灰釉鉢が存在する。天目茶碗は旧瀬戸村・新七窯跡出土のもので、口縁が外へ折れ曲がり、腰部が縮腰状になり、断面台形の高台となる形態のものである。これは『瀬戸史料 全』(名古屋市鶴舞中央図書館蔵)に図示されている「黒天目」と表記されているものに特徴が似ている。また、他に「広東」「萩茶わん」「無記名のもの」「う寿茶」「黒利休」「黒小丸」が図示されている。さらに、別に「天目」と表記した形の異なる天目茶碗が図示され、これは登窯Ⅶ期の型式に特徴が似ている。これらのことから、新七窯跡出土の天目茶碗は両図と

比較して広東茶碗と併存する時期に存在する可能性があることから登窯Ⅷ期の型式として捉えて置くことにする。

登窯Ⅸ期の陶磁器（1830～1859年・天保～安政年間）

焼成器種はⅧ期の陶器の器種がそのまま引き続いているが、全器種にわたり小形化、偏平化の退化現象が認められ、大量生産による質的悪化の傾向を示している。他方で染付磁器の広東茶碗・腰丸茶碗の生産が染付陶器（陶胎染付製品）に変わって次第に多くなり、上質の磁器製品の大量生産が定着した。

推定実年代資料は（伝）岐阜県多治見市・水神窯跡出土の天保9年（1838年）銘の染付広東茶碗、愛知県名古屋市・名古屋城二之丸跡庭園出土の天保13年（1842年）墨書銘鉄釉掛け分け茶碗（注34）がある。（注35）

（4）幕末明治の陶磁器

登窯Ⅹ期を比定し、1860年～1889年（万延～明治22年まで）を充て、それ以降の近代陶磁器の編年については今後の調査研究が進んだ段階で補訂することにする。

登窯Ⅹ期の陶磁器（1860～1889年・万延～明治22年）

幕末から明治にかけての時期は明治4年（1871年）の廃藩置県による幕藩体制の解体によってその生産が廃絶されたと考えられている旧下半田川村・かみた窯跡のように窯業生産を廃止する窯屋が存在することはあったが、生産内容そのものは明治時代へと引き続いていくものであって染付陶器（陶胎染付製品）が消え、染付磁器生産が拡大することである。染付磁器の茶碗類に端反りの蓋付茶碗が登場するのが特色の一つである。かみた窯跡においては元治元年（1864年）銘の棚板（注36）が出土しており、棚積み窯詰めが行われたことが確認され、大形の徳利・大鉢・甕類の量産を可能とした。

注

- (1) 加藤庄三『民吉街道一瀬戸の磁祖 加藤民吉の足跡一』東峰書房 1982。
- (2) 加藤唐九郎「茶器弁玉集」（『陶器全集』2）思文閣 1976。
- (3) 滝本知二「藤四郎と茶入」（『陶器講座』1）雄山閣 1972。
- (4) 『張州雑志』第12巻 愛知県郷土資料刊行会 1976。
- (5) 三上次男「古代末中世初における瀬戸地方の作窯技術とその発達」（『東京大学教養学部紀要』古代研究2）東京大学教養学部 1955。
- (6) 藤澤良祐「瀬戸・美濃窯における中世施釉陶器について」（『考古学ジャーナル』280）ニュー・サイエンス社 1987。
- (7) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）瀬戸市歴史民俗資料館 1986。
- (8) 山川一年他『穴田第1・2号窯発掘調査概要』瀬戸市教育委員会 1981。
- (9) 土岐市泉町久尻・元屋敷窯跡が最古の連房式登窯とされている。
- (10) 瀬戸・美濃窯の編年の研究の文献（年代順）。
美濃古窯研究会『美濃の古陶』光琳社出版 1976。
拙稿「美濃窯編年図表」（『日本やきもの集成』3 瀬戸美濃飛騨）1980。
田口昭二『美濃焼』ニュー・サイエンス社 1983。
植崎彰一「瀬戸・美濃窯操業年代」（『江戸のやきものシンポジウム資料（共通5）』）五島美術館 1984。
田口昭二「近世美濃窯の変遷」（『東洋陶磁学会第12回大会研究発表要旨』）東洋陶磁学会 1984。





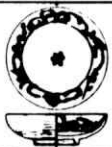









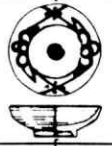









- 拙稿「美濃窯編年図表」(『日本やきもの集成』3 瀬戸美濃飛騨) 1987。
- 藤澤良祐「本業焼の研究(3) 一下品野村・下半田川村を中心一」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ) 瀬戸市歴史民俗資料館 1989。
- 住田誠行「近世美濃窯の変遷Ⅰ一可児郷1号窯を中心にして一」(『美濃の古陶』3) 美濃古窯研究会 1989。
- 植崎彰一「尾呂一総括」(『尾呂一愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』) 瀬戸市教育委員会 1990。
- (11) 藤澤良祐「本業焼の諸段階」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ) 瀬戸市歴史民俗資料館 1989。
- (12) 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ～Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館 1987 - 1989。
- (13) 鎌木義昌他『池田忠雄墓所調査報告書』岡山市教育委員会 1964。
- (14) 徳川義直は1650年(慶安3年)江戸で没し、墓所は定光寺に1652年(承応元年)完成した。
- (15) 藤澤良祐「本業焼の研究(2) 一赤津村・上水野村を中心一」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅶ) 瀬戸市歴史民俗資料館 1988。
- (16) 梅本博志他『名古屋城三の丸遺跡(I)』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990。
- (17) 藤澤良祐「本業焼の研究(2) 一赤津村・上水野村を中心一」(前掲書)。
- (18) 梅本博志他『名古屋城三の丸遺跡(I)』(前掲書)。
- (19) 新宿区新宿歴史博物館特別展図録『江戸のくらし一近世の考古学の世界一』1990。
- (20) 梅本博志他『名古屋城三の丸遺跡(I)』(前掲書)。
- (21) 小玉道明・吉村利男『戸木城址発掘調査報告』久居市教育委員会 1979。
- (22) 仲野泰裕「浅間山の大噴火(天明三年)に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』5) 1986。
- (23) 小沢一弘「清洲城下町遺跡」(『年報 平成元年度』) (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990。
- (24) 藤澤良祐「本業焼の変遷(1) 一本業焼編年表(2) 図示」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ) 瀬戸市歴史民俗資料館 1987、仲野泰裕「江戸時代後期の本業」(瀬戸市文化センター・瀬戸市歴史民俗資料館10周年記念特別企画展図録『江戸時代後期本業展』) 1988。
- (25) 横沢克明他『中村遺跡』渋川市教育委員会 1986。
- (26) 仲野泰裕「江戸時代の瀬戸窯と京焼風陶器」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』6) 愛知県陶磁資料館 1987。
- (27) 内藤正参の著で百冊。年記の早いものは安永元年(1772年)12月で天明8年(1788年)死去まで継続されたが未完(国史大辞典)。
- (28) 滝本知二『瀬戸市史 陶磁史篇三』瀬戸市 1967、加藤庄三『民吉街道一瀬戸の磁祖 加藤民吉の足跡一』東峰書房(前掲書)。
- (29) 滝本知二『瀬戸市史 陶磁史篇三』(前掲書)。
- (30) 滝本知二『瀬戸市史 陶磁史篇三』(前掲書)、古瀬戸連区誌編纂委員会『古瀬戸洞今昔四方山話』古瀬戸連区 1980。
- (31) 藤澤良祐・池本正明「西茨第2号窯(勇右衛門窯)」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ) 瀬戸市歴史民俗資料館 1987。
- (32) 藤澤良祐「本業焼の研究(1)」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ) 瀬戸市歴史民俗資料館 1987。
- (33) 新宿区新宿歴史博物館特別展図録『江戸のくらし一近世の考古学の世界一』(前掲書)。
- (34) 住田誠行『笠原町の文化財1』笠原町教育委員会 1974。
- (35) 藤澤良祐「本業焼の研究(1)」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ) (前掲書)。
- (36) 藤澤良祐「本業焼の研究(3) 一下品野村・下半田川村を中心一」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ) (前掲書)。

近世瀬戸物編年図表 (II)

碗・皿類

編年	器種	天目	碗	茶碗
1605	登窯 I			
1624	登窯 II			
1655	登窯 III			
1688	江			〔御室〕 〔腰錆〕 〔せんじ〕
1688	登窯 IV			
1716	登窯 V			
1744	登窯 VI			
1772	戸			
1772	登窯 VII			
1801	登窯 VIII			
1830	登窯 IX			
1860				
1889	明治			

0 10 20 30 40 50 cm

茶 碗						皿	
							
							
							
							
〔長の〕	〔色絵〕	〔柳〕	〔笹〕	〔広東〕	〔腰丸〕		
							
							
							
							

(実測図は瀬戸市歴史民俗資料館刊行の報告書から引用。)